日本は昭和20年8月15日に終戦を迎え今年で64年。

戦争で負傷したり、家族を失うなど苦しい体験やつら い思い出を胸に秘めながら今日を迎え 安平町にも第 今月は戦時 ています。 名の町民の方に話し

ります。 ていました」と当時を振り返 官の指示は絶対だと教えられ 令に逆らうことはできず、 軍国主義の時代は軍の 上 命 働くことになりました。

歳のとき横須賀の軍需工場で 町内で3名に命令が下り、 は四男の寺嶋さんだけでした。 兄弟姉妹10人のうち届いたの 用する令状が父に届きました。 7月に突然役場から海軍に徴 農家を手伝っていた昭和16年 まれで現在85歳です。実家の 弘三郎さんは大正13年3月生

17

は

いましたが、連隊は壊滅し撤 終戦後の8月24日まで戦って

手榴弾1個を持ち武器を

た宮崎さんが所属する部隊は 力を見せ付けられ恐怖を感じ

休みなく働く日

時 7時から夜7時までと、 週間交代の24時間体制で、 機械のベアリングを製造。 寮では一部屋に4名が同居生 寺嶋さんが働く工場は精密 から翌日の7時までの勤務 活をし、 1 0 0 夜 7 朝 1

を担い、 0人が兵器造り 準備を進めてい 0人から120 戦争の 農業に従事。 安を感じていました。 殺しに来ると先輩に脅され不 れた青春時代を取り戻すかの その後、

寺嶋さんは帰郷

国によって奪わ



命令は突然に

早来緑丘で農業を営む寺嶋

たため中止。「もし出発したら 成人し7月にサイパン島に軍 と語る寺嶋さん。 壕に逃げ込んだことぐらい」 ことと、空襲警報が鳴り防空 思い出はひたすら働いていた ことは日常茶飯事。 をすると怒鳴られ、 しょう」とぽつりと話します。 生きて帰って来れなかったで が強くなり危険な状態が続い 艦の修理に行く予定が敗戦色 そして迎えた8月15日。 昭和20年に 戦争中の 殴られる

ら天皇陛下の声が流れ、 声器で広場に集まるようにと 寺嶋さんは、アメリカ人が皆 に負けたとはっきり聞こえた 言われ全員が集合。ラジオか 戦争 俵を担いだそうです。 ます。 には自信を持ち、当時は米

負け戦で九死に一 生

ます。 して1度に72発の弾が出る機 を悟った」と宮崎さんは言い 「ソ連兵の武器を知り敗戦 日本の単発式の銃に対

くれました。

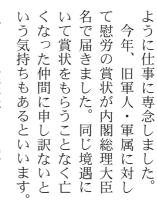
体力と健康が自慢

脱ぎ裸足で走らされた思い出 樺太に向けて出発しました。 が甲種合格し稚内を経由して 置きし、樺太(サハリン)でソ が鮮明に残っている」と話し れない日はなく厳冬期に服を 84人が兵隊検査を受け30人 ん(早来栄町)は昭和19年2月 ビエト軍と戦った宮崎長吉さ に召集。近隣市町合わせて、1 載せないでください」と前 「6か月の訓練期間に殴ら 名前は掲載しても顔写真 両親はすでに他界。農

業をしていたので体力と健康 しいと力説していました。

くの日本人たちの上に現在の 誤った国策で犠牲となった多 に少なくなっていきました。 と惨劇を思い出し口数が徐々 捨てて敗走しました。 私たちがいることを考えてほ の尊さを再認識し、 主的であることを喜び、平和 還できた宮崎さんは自由で民 なる光景を間近に見てきた」 「戦争で女性や子供が犠 運よく北海道に流れ着き生 当時の

よ」と苦笑し、 理大臣名の入った置時計が記 念品として贈られただけです 人恩給は受けられず、 「過酷な戦争体験をしてき 年数が足りないため軍 実物を見せて 内閣総





国から贈られた置き時計